

# SHOW HEY シネマルーム



**Data**

監督: ジョン・カラン  
出演: ロバート・デ・ニーロ/エドワード・ノートン/ミラ・ジョヴォヴィッチ/フランシス・コンロイ/エンヴェア・ジョカイ/ペッパー・ピンクリー

## 👁️👁️ みどころ

刑務所内で勤務する仮釈放管理官とは? 『おくりびと』(08年)をみれば納棺師が、本作をみれば仮釈放管理官の仕事がよくわかる。俺の刑期はあと3年。しかし、仮釈放管理官を女の魅力でたぶらかせば・・・? そんな想定はどの国でも「あり」だが、さて、その女が女房になると・・・?

「強い女」一辺倒だったミラ・ジョヴォヴィッチの「誘う女」ぶりに、きっとあなたは頭クラクラ。しかし、本作が描く微妙な精神世界の構想はイマイチ。もっと、単純でわかりやすい脚本で良かったのでは?

\* \* \* \* \*

## 映画から学ぶあんな仕事、こんな仕事?

時代が違い、国が違い、制度が違えば、さまざまな職種・職域が生まれるのは当然。私は26期登録の弁護士だが、これは戦後の法曹一元の理念の下に生まれた制度下での弁護士だから、「治安維持法」があった戦前の弁護士とはその地位や役割は全然違う。しかも、そもそも弁護士の前身は「代言人」と称していたものだ。映画は勉強。私はいつもそう主張しているが、さて映画から学ぶあんな仕事、こんな仕事とは?

邦画のその1は、『休暇』(08年)ではじめて見た刑務官が担う死刑囚の「支え役」という仕事。死刑執行のボタンを押す仕事も大変だが、上から降りてくる死刑囚の身体を支えるという仕事も大変。したがって、「支え役を志願すれば、1週間の休暇を与える」という設定もうなずけるものだった(『シネマルーム20』142頁参照)。邦画のその2は、『おくりびと』(08年)で一躍有名になった納棺師(『シネマルーム21』156頁参照)。映画ではこの仕事が美しく描かれていたが、さて実際は?

他方、ハリウッド映画のその1は『消えた天使』(07年)が描いた、性犯罪前歴者を監視する監察官。これはデータベース上で公開された性犯罪前歴者の情報を管理し、それを監視する仕事だからかなり大変(『シネマルーム16』200頁参照)。ハリウッド映画のその2は、『サンシャインクリーニング』(09年)が描いたハウスクリーニングの仕事。血が飛び散り、腐乱死体が残置してあった部屋でもキレイにクリーニングすれば新品同様になるのは当然だが、さてあなたはそんな職業に新規参入できる？

## また新しい職種・職域を発見！

私が本作で発見した新しい職種は、刑務所内で勤務する仮釈放管理官。これは受刑者と面談して仮釈放審査会のための書類を作成する仕事らしい。ロバート・デ・ニーロ演ずるジャックは、長年そんな仕事に従事し今や定年間近となっていたが、彼が最後に担当している受刑者はジェラルド・クリーソン、通称“ストーン”(エドワード・ノートン)。放火によって祖父母を死なせた罪で8年間服役してきたストーンはあと3年の刑期を残していたが、かなり反抗的。形式的な質問に対してもすぐにイライラして突っかかってくるストーンに対して、ジャックは「私の話に応じなければ仮釈放はない」と反論していたが、私が見る限りこりゃ少し感情的。過去何十人、何百人に対して仮釈放管理官として肅々と向き合ってきたのだから、ストーンに対してここまで感情的にならなくてもいいのでは？

ストーンも私と同じようにジャックの弱点を見出したのか、以降ストーンはある作戦を……。それは、中国でよく使われているハニートラップ作戦。つまり、『三国志』で王允が養女・貂蝉(の色香)を使って董卓と呂布の仲を裂いた「連環の計」だ。その作戦を実行するのは、定期的に面会にやって来ているストーンの妻・ルセッタ(ミラ・ジョヴォヴィッチ)。彼女は昼は幼稚園で子供たちを教えているが、色気ムンムンの女で、夜は男たちに体を売ることも楽しみの1つ。また、今日の面会でも看守の目を盗んで夫の手を自分の股間に。何でも今日の服装はスペシャルらしいが、さてそれはどんなスペシャル？

それはともかく、そんなルセッタにとっては、ストーンからの「ジャックを誘惑して早く仮釈放してもらおうにせよ」との指示はうってつけ。さあ、彼女はジャックに対してどんな(肉弾)攻勢を？

## ストーンの変身はなぜ？それがイマイチ……？

「強い女」もいいが、たまには「女らしい女」も……。そう考えたのかどうかは知らないが、『フィフス・エレメント』(97年)、『ジャンヌ・ダルク』(99年)はもちろん、その後の『バイオハザード』シリーズでとにかく「強い女」ばかりを演じているミラ・ジョヴォヴィッチが、本作では180度変身し、男を誘惑する女・ルセッタを熱演。これだから女はコワイ。でも、こんな風に迫られたら、若い男はもちろん、妻のマデリン(フラ

ンシス・コンロイ)と聖書と教会を中心とした信心深い生活を送っている初老(?)のジャックだって・・・。

私が予想した単純な脚本は、ルセッタの魅力に負けてストーンを仮釈放してしまった後、今度はストーンとルセッタからジャックが脅迫めいた無理難題を突きつけられ、その結果・・・?そんなストーリーだが、本作はそんな単純なものではなく、ある日刑務所内の図書館で読んだ聖書から、ストーンがある精神世界に目覚め、急変身していくというもの。これにはまず、それまでの実利一辺倒で、その価値観を共有していたルセッタがビックリ。ストーンは何をワケのわからないことをしゃべっているの?ルセッタはそんなストーンにイライラ。他方、せっかく仮釈放の書類をつくってやったのに、「俺はどっちでもいいんだ」とほざいたうえ、ジャックに対して「正しいことをしろよ」とお説教をたれるストーンに、ジャックはブツン!それは当然だが、そこで困るのは、ストーンはなぜこんなに急変身したの?それが、スクリーンを覗いている私にもイマイチわからない・・・。



© 2010 STONEBURGH PRODUCTION, INC.

## この冒頭は?このラストは?

本作の冒頭には、若き日のジャック(エンヴェア・ジョカイ)とその妻マデリン(ペーパー・ピンクリー)の夫婦ゲンカの姿が登場する。テレビばかり見て自分に全く関心を示

さないジャックに対して堪忍袋の緒が切れたマデリンは、「もう我慢できない。家を出ていく」と叫んだが、それに対してジャックは2階にかけ上ったかと思うと、幼い子供を窓から下に投げ捨ててしまうかの勢いを示して対抗。これにはマデリンも降参して「もう出ていきません」とあやまったから、これにて2人は仲直り・・・？

その後スクリーンは一転してジャックの定年にともなう引継ぎシーンに変わるから、この冒頭シーンは一体何？それがなかなかわからない私のような観客も多いのでは？

他方、ストーリーが展開していく中、ジャックがルセッタとめくるめく肉体関係を持っていたことは、ちゃんとルセッタの口からストーンに報告されていたから、ルセッタがストーンを迎えにきた釈放の日に3人が一室で会した時の雰囲気は最悪。この後一体どんな波瀾が？そう思っていると案の定、ある夜ジャックが怪しげな物音に気づいて階下へ降りてみると、そこは既に真っ赤な火の海に。こりゃ一体誰が？犯人はきっとストーン。そういらんだジャックの、その後の行動は？

他方、念願の仮釈放を実現させたルセッタは、今頃幸せいっぱいな気持ちで戻ってきた夫・ストーンと同じベッドの中に。誰もがそう考えるはずだが、さて本作のラストは？

二大俳優の激突と、その中に妖しい女ミラ・ジョヴォヴィッチを入れ込んだ本作は、単純でわかりやすい映画。そう予想していた私には、本作の冒頭も少し？なら、ラストも少し？さて、あなたは・・・？

2010(平成22)年10月22日記

## ミラ・ジョヴォヴィッチのさらなる新境地に期待！

私の独断と偏見による採点では、ミラ・ジョヴォヴィッチ主演の『バイオハザード』シリーズ最新作『バイオハザード アフターライフ』(10年)の星は2つ。最初からあまり気が進まなかったが、予想どおり結果的に時間のムダとなってしまう。彼女は『トゥームレイダー』シリーズのアンジェリーナ・ジョリーと共にハードなアクションが似合う女優の双肩だが、『ジャンヌ・ダルク』(99年)のような高貴な女性も、『ストーン』(10年)のような怪しげに「誘う女」も立派にこなせる演技派女優。アンジィは『チェンジリング』(08年)

で惜しくもアカデミー賞主演女優賞を逃したが、最後までわが子の生存を確信し、腐敗した警察組織と戦う強い母親像の熱演は心を打つものだった(『シネマルーム22』51頁参照)。75年生まれのミラ・ジョヴォヴィッチはまだ35才。女優として最もいい年齢であるうえ、あの彫りの深い顔だちは超一流だから、歴史モノのヒロインをはじめ、どんな役柄でもこなせるはず。母親役は年をとってからやればいいのだから、『ストーン』で魅せた新たな役柄から、さらなる新境地を切り拓くことを期待したい。

2010(平成22)年10月30日記